

Title	ヒューマニスト、ギaskellと産業革命期の英国労働者階級：ギaskellの英国の産業人口一八三三年、を読んで
Sub Title	P. Gaskell, a humanist and the British working-class in the age of the Industrial Revolution.
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.5 (1954. 5) ,p.557(93)- 566(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19540501-0093
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540501-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

差額地代の増加ではなくして、土地所有に基づく権力を背景とした剰餘労働の汲みとり、本質的には變化しなかつた地代の半封建性の強化である。

註1 K. P. O. S. 889. マルクス「資本論」長谷部文雄譯青木分庫第十三分冊五八頁。

註2 平野義太郎「農業問題と土地改革」五八頁。

註3 小池基之「戦後における農業理論の一展開」(一)日本農業再建の論理「農業近代化の理論」四六頁。

註4 井上晴丸「戦後農地改革と半封建制」(季刊「理論」一九號一〇頁)「改革による地主制の再編成」(一)日本資本主義講座」第五卷六八頁。

註5 同「改革による地主制の再編成」前掲書六八頁。

註6 同 前掲書 同 頁。

註7 同 前掲書 六九頁。

註8 同 前掲書 同 頁。

註9 同 前掲書 同 頁。

註10 同 前掲書 七〇頁。

近藤康男「從屬體制Ⅱ再軍備體制における再編地主制の強化」前掲書一〇二頁。

このように「日本農業がその基盤としての土地所有の集中的表現として見出した地主的土地所有とそれに對立する零細農的土地所有」が農地改革によつても基本的には變化しえなかつたとすれば、この見解に立つて農地改革の意義はどこにあるであ

らうか。
意義

それは資本主義の全般的危機において從屬體制に組込こまれた日本資本主義が、その構造的危機の一環である「未曾有の地主制の危機」を、獨占資本の最大限利潤確保のための基盤たる農業における半封建的生産關係、「地主制の根ともいふべきもの」をもせんじつめた基本的本質」を残しおせつつ打開したことにある。日本の獨占資本と地主だけでは踏みきりがつかぬ線が、アメリカ獨占資本にうながされて行われたのである。「農地改革が齎らした効果は、日本の農民に土地所有の渴を醫やし、一片の土地を所有した多數の職工を作り出したということである。低賃銀を補うところの自家用農業、首を切られても社會保險を要しない物的根據を一片の自作地は約束してくれ。農民の意識は從來よりも一層アチ・ブル的となり、労働運動と農民運動との關連性を切斷せしめる。……農民を防共の堤として強化する意味においては、農地改革は正に百パーセントの効果をおげたものといふことができるようである。」

地主制の残存は舊い部落秩序を維持し國家權力にバックアップされて「低米價供米制度を貫徹せしめ」獨占資本の危機打開のための低賃銀政策の有力な基盤を提供し、最大限利潤獲得のエンジニアたる役割を果すと同時に、部落割當を通じて經濟的にも政治的にも獨占の利益の配當にあづかるのである。

註1 小池基之「農地改革の歴史的課題」(農業近代化の理

論」二二頁。

註2 井上晴丸「改革による地主制の再編成」(一)日本資本主義講座」第五卷七八頁。

註3 同 前掲書 同頁。

註4 同 前掲書 六七頁。

註5 近藤康男「農地改革の諸問題」二三頁。

註6 井上晴丸 前掲書 七七頁。

註7 同 前掲書 同 頁。

まことに農地改革は「外から、上から與えられて遂行せられたもの……。獨占資本の要請によつて行われたもの」である。

註 小池基之「地主制の諸問題」前掲書一三頁。

問題點

二つの道の理論の適用が古典的な資本の本源的蓄積期においてなされる場合、資本主義の或る程度の發展が前提とされる場合(ロシアのように)に對して、獨占資本主義段階における適用の差別性が明らかにされることにより、半封建的生産關係に基づく剰餘價値の収取の弱化したあとの農業經營の再生産の理論的分析をおしすすめて、改革後における剰餘價値の収取のされ方——日本資本主義における資本と地主的土地所有の癒着の仕方をふくめて——の解明を期待したい。

五

以上が「耕作農民による經營農地の所有を奨励し、以つて彼らが『労働の成果を享受する機會を均等化する』こと」を目標

ヒューマニスト、ギヤスケルと産業革命期の英國労働者階級

とした農地改革に對する諸家の見解とその問題點である。日本農業の前途は容易ではない。「農地改革の進行にもかかわらず、なおそこには農業生産力の發達に裏づけられた富農經營の展開に對してそれを阻止するような諸條件が數多くみられる」——残存せる地主制をふくめて——のである。

註1 Laurence I. Hews (G. H. Q. 天然資源局顧問) "Japanese Land Reform Program" 農林省農地局

農地課譯「日本の農地改革」二〇七頁。

註2 小池基之「農地改革と農業の近代化」(農業近代化の理論)一六〇頁。

ヒューマニスト、ギヤスケルと

産業革命期の英國労働者階級

——ギヤスケルの「英國の産業人口」

一八三三年、を讀んで——

飯 田 鼎

一、ギヤスケルと産業革命

二、手工業者の貧困といわゆるヨーマン階級

三、工場制度の確立とその影響

九三 (五五七)

四、兒童および婦人労働

五、労働者の團結

同かつてフランスの哲學者アンリ・ベルグソンはつぎのように言つた。「蒸氣機關が發明されてから一世紀が経過した。そしてそれがわれわれに與えた衝撃の深刻さを、今ようやくわれわれは感じつゝある。しかしそれが産業において成しとげた革命は、人と人との關係を根本的に轉覆せしめた。今や新しい思想は起り新しい感情はほころびようとしている。幾千年か経つたのち、遠くへだて、現代のたゞ幅太い外輪だけが展望されるときが來たならば、われわれの時代の戦争や革命は物の數とも影じまい。だが蒸氣機關とそれにもなう一連の發明だけは、われわれが今原始時代の銅器や鐵器を云するが如くに人間の話題にのぼるであらう」と。産業革命が近代經濟史の上にとどのような意義をもち、それが市民社會の成立にとつてどれほど重要な一時期であつたかは、既に多くの史家にとつて探求されて來たことであつて今更云うまでもない。

だが解決済みであるはずのこの産業革命が、ともすればわれわれの心に新たな問題をなげかけ再検討をせまつてやまないのは何故であらうか。今日、産業革命の研究が再びとりあげられるに至つた理由は數々あるうけれども、それは單なる知的な關心だけによるのだろうか。思うに現代資本制社會における根本的矛盾——一方における巨大な富の蓄積と他方における救いが

たい貧困——が現代ほど深刻に、そして今日ほど集中的にその様相をあらわにした時代はなかつたからではないだろうか。現代は革命の時代と云われるが、二十世紀の後半に立つて耳をすませば、あるたくましい足どりとしづかな息吹とが、新しい革命を豫言するものとして感じられるとき、現代社會のいろいろの矛盾に悩みながら生きるわれわれの苦悶は、そのまゝ産業革命の時代に生きた人々の悩みと相通するものがあるからであるうか。ギヤスケルはこのような十八世紀の後半から十九世紀にかけての古い制度の崩壊と新しい社會の形成という激動の時期にあつて、労働者階級の生活を觀察し、たえず彼等の立場に立つてその生活の向上と幸福とを眞剣に考へたヒューマンリストの一人であつた。

いやしくもマルクスの資本論を注意深く讀んだ者ならば、第一卷第四篇第十三章機械及び大工業のところにギヤスケルの「英國の産業人口」が引用されているのに氣がつくだろう。おそらく偉大なマルクスが資本論に専心してゐた當時、參考資料はあまり豊富ではなかつたやうで工場監督年報のような官廳報告書や新聞などがその當時の労働者の状態をさぐる重要な手ばかりであつたと思われ。従つて一九世紀初頭までに書かれた労働問題に關する權威ある書籍もさきわめて少く、わづかにイデンの「貧民の状態」やユーアの「マニユファクチュアの哲學」などであつて、ギヤスケルの「英國の産業人口」もマルクスが資料として利用したことは勿論、エンゲルスもまたこの書によ

つてマンチェスターの労働者の状態を説明しているところを見れば、この書は當時定評を得ているものと考へることができよう。しかしながら即ち稀觀本となつていゝか、重要な文獻であるにもかゝらず、正に讀まれざる古典となつてゐるので、筆者はここにギヤスケルがその眼で見、その耳できいたと思われる色々な事實を、現代の光をあて、讀んでゆきたいと思ふ。

もとよりギヤスケルは經濟學者ではない。「英國の産業人口、その道徳的社會的自然的な状態、すなわち兒童労働の考察をも含めて、蒸氣機關の使用の結果おこつた變化」というきわめて長い題名をもつこの書のなかには、ペンサムやマルサスのことは少しのべられてゐるが、アダム・スミスやリカードのことは全くふれてゐないし、労働者階級に對する考へ方も社會學的で、しかも興味深いことは失われゆく牧歌的な生活に限りない郷愁と愛著とをこめてゐることである。しかも同じ時代に生きて労働運動の上に偉大な足跡をのこしたロバート・オーエンについては少しもふれてゐないし、むしろ労働者の團結にはあまり好意をもたなかつたやうで、どちらかと言へば自由放任主義に反對する社會改革論者、いわゆる博愛主義者であつたのだ。筆者がヒューマンリストと云つたのはこの理由からである。

- (1) マルクス「資本論」第一卷第一分冊四二〇頁。
- (2) エンゲルス「英國労働者階級の狀態」竹内譯一八九頁。
- (3) ギヤスケルには今「Artizan and machinery,

ヒューマンリスト、ギヤスケルと産業革命期の英國労働者階級

1800」という有名な著書がある。なおイギリスの社會小説として有名な「メアリー・バートン」を書いたギヤスケル夫人は同時代の人であるが、關係はないと思われ。

二

一七六〇年代の英國は家内工業の支配的な農業國であつた。従つて十八世紀の後半に至つて産業革命の息吹がすでに感じられたとはいへ、手工業者は賃金労働者としてよりもむしろ獨立の生産者に近い型態をとつてゐた。しばしば語り傳へられるやうに、手工業者たちは自分のさゝやかな仕事場と生産に必要な道具をもち、その上、住居のまわりには少しばかりの土地をもつて仕事の餘暇にはこれを耕すという自由な生活を營んでいたのであつて、獨立生産者層から生産手段をうばい、彼等を故郷から追放したものをほかならぬジェニー紡績機とこれにつゞく機械の改良をして蒸氣機關の發明であつたことは云うまでもない。けれども十八世紀から十九世紀にかけて英國の家内工業をおそつた運命は、同じく他の階級すなわちスクワイヤと云われた大地主や、獨立自營農民と云われた人々の上にも大なり小なりふりかかつて來たのである。

農業革命以來、手工業にも次第に變化がおこり、とりわけ毛織物業の發展はめざましかつた。十八世紀の中頃まで糸をとる機械と云えば糸とり竿か、精々糸車かあるだけであつたが、毛織物の需要が増大するとともに、紡績技術の上にも次第に改良が行われたのであつた。しかし當時の因襲や偏見の根強い反撃

にあつて容易にひろまらなかつた。従つてこの紡績機械の發明は從來ともすればその供給が不足がちであつた織糸の生産を急速に増大させ、そのために手織職人の仕事は非常に忙しくなつたのであつて、一九世紀のはじめ、大人四人子供二人の六人家族で一日十時間働くものとして週四ポンド以上の収入をあげる事ができたとき云われる。云うまでもなく手織工たちにとつて彼等の仕事が忙しくなり収入はふえて生活が榮になつたことは嬉しいことであつた。しかしそれはまた彼等に今迄保有して來た耕作地を農業小作人たちにまかせなければならぬといふことであつて、手織工たちがみずから耕していた土地を手離さなければならなかつたといふことは、たとえそれが毛織物の需要がふえたという理由であつたにせよ、彼等の身分が社會的な意味で、前よりも低くなつたといふことになるのだつた。何故なら土地を保有しつゝ機械に従うといふことは、かつて彼等に獨立自營農民か、或は土地保有者と同じ社會的地位を與えたものであつて、それが彼等にある種のプライドと品格とを與えたものだつたが、今やその物質的な裏付けは失われてしまつたからである。ともあれ毛織物の需要が増大し、織糸の供給も充分となるにつれて彼等の生活も豊かとなり、蒸氣機關が出現して手織工たちの生活をひどく、みじめなものにするまでのしばらくの間は、手織工たちにとつていわば黄金時代であつた。一方紡績工たちの生活状態はどうであつたらうか。マニユファクチュアの初期にあつては、紡績工と織工とはある程度まで同義語

であつて、實はその行程は同じ屋根の下で同じ個人の手で行われ、糸巻竿も紡車もそしてまた機械も一家族の者が共同して行う場合が少くなかつた。ところが糸をとることゝ織ることが別々に行われるようになり、やがて富裕なヨーマン階級の手によつていわゆるマニユファクチュアが行われるようになること、ここに紡績工たちの身の上にも大きな變化が起つて來た。これらの工場は羊毛を刷毛ですくこと、紡ぐことを專業としたために家内工業労働者は大きな打撃をうけ、新しい機械の發明によつて彼等の生産した糸は大量生産の彼に吞まれ、全く價值以下の價格で買い取られ、紡績工たちの生活は益々苦しくなつてい

つた。さてここで十八世紀英國の誇りであつたヨーマン階級の生活はどうであつたか。幸にして志をえた人たちは没落をまぬかれて近代的な産業資本家になることもできたのであるが、そういう場合はむしろ少なかつた。農業への資本主義の浸透につれて、ヨーマン階級は、みずからその有爲轉變に處し自己保存のためにやむなく新たな冒險に乗り出さなければならなかつたのだ。彼等がこの經濟的な變動の中でどんなに苦惱したか。一部の富裕な者は別としても、ヨーマンがどんなに無理をして紡績機械を買わねばならなかつたか。彼等の七人のうち五人までは、紡績機械を買入れ金をうるために土地や家屋を抵當に入れなければならなかつたことからも明らかであろう。大多數のヨーマンと自由な土地保有者たちは、この新しい職業に身を

投しても成功せず、工場經營者となつた少數の人たちのほかは輿落の悲運にあわなければならなかつたのであつて、その結果は自由な土地保有者及びヨーマン階級の消滅であつた。そしてそれはまた近代的なプロレタリアートの先驅者であつたと云へよう。

(1) マルクスはヨーマン階級の没落を一七五〇年代としてゐるが、トインビーはこれを批判し、實證的に一七七〇年代にもなお多數のヨーマン層が残存していたと言つてゐるが、しかし思うにその經濟的な基礎はきわめて弱いものはなかつたらうか。

三

蒸氣機關の發明にともなう工場制度の確立は、家内工場時代とはちがつた家族關係をつくり出した。家内労働者の大きな利益は、自分の仕事とその屋根の下で營まれ、子供たちもまた自分の監視のもとに共通の利益のもとに働いていたといふことである。工場制度はこの家族的な紐帯をたち切つた。家はただ癡て喰うための場所と化し、また家族の者は皆別々の工場で、別々の職場で働くので、子供たちは親の監視のとゞかぬ所で相互に交わる。しかも雇主によるこれら少年たちに對する冷きびしい仕打ちが子供たちの若い感情をむしばむばかりで自尊心にとつては最も悪いものであつて、このようにして家内工業もつていたあらゆる美點は失われる。子供たちが、彼等なりに賃金を得るといふことは、家族内におけるその從屬的な地位から

解放し、両親は自分の子孫のための宿舎の番人と化してしまふのである。すなわちギヤスケルはつぎのように言つてゐる。「結局において彼等を大眾としてばらばらの個人としての心なき集り、つまりよりやさしいより上品なそして更に情深い配慮、抱負や感情などには影響をうけない制約されない『みづからの腕』をもつて奮闘する個人にしてしまつたのだ」と。しかし何よりも工場労働者をして道徳的に墮落させる大きな原因となるものは、家庭的な愛情に缺けてゐることである。こまやかな家庭の愛情こそ彼等の心に温かさを與え人間らしさを與えるものであるのに、幼い工場労働者にはそれが失われてゆく。

人はしばしば農業労働者もその家族との別離を経験した點では工場労働者と同じではないかと云うかも知れない。もちろん農業労働者もその例外ではなかつた。だが農業労働者は時として一家別離の悲哀を味うことはあつても、その大部分は集團的に行動し一團となつて仕事に従事する。その労働のきびしさに對しては時として工場労働者に劣らぬことはあるとしても、農業労働者の食物や空氣は新鮮であり、環境はよく工場労働者に見られる悪徳の泉は見出されないからである。いやそればかりではない。農業労働者は時には地主や中流階級の農場主の相談相手としてまた助手として貧しいながらも清潔な生活を營むことができたのである。では工場制度そのものは實際に、その當時の産業人口にどのような影響を及ぼしたであろうか。ランカシャー州の大工業都市マンチェスターは紡績業の中心として有名

であるが、労働者の状態はひどかつた。昔からランカンヤ地方はすぐれたジャガイモの産地として有名で、小麦粉や良質のバターをしてまたチーズも豊富である。だがこれらの新鮮な食物は金持や紳士階級の手に入り、新鮮さを失つて、ただ安いというだけのくさりかけた肉やしなびた野菜などが労働者階級の食物となる。粗悪な食物と慰安のない家庭、そしてまた夜も晝も絶え間なく続くはげしい労働は、當然彼等をアルコールとビールのなかに刺戟を求めさせることとなる。統計の示す所によれば當時のマンチェスターにはほとんど千近くのビア・ホールが開かれ、その九割は労働者階級を相手とするものであつて、裏路地に密集しているといわれる。これらの酒場は飲みたくて震えている労働者たちが、うちかちがたい誘惑をおさえてようやくその仕事につこうとしているとき開かれ、家庭の温い爐邊のたのしみとよろこびの中にこそ心よい刺戟と快楽とを求めることを忘れた人々に深夜までそのほかない快楽を賣る。だがおどろくべきことは、この邪悪であり墮落しているあらゆるものをうけ入れているこの場所に入入する者はひとり大人の労働者だけではないことである。母親はその泣く子をかかえ、娘はその戀人につれられて、或は母親はまた娘をつれて父はその息子と一語に、祖父はその孫をともなつて皆ここに入入する。賣笑婦、スリなどの社會のいわばクズともにもむらがつて女はそのあらゆる貞節と優しさを失い、男はその尊ぶべき誠實な感情をうばわれたとき、かくして悪徳、姦淫、近親相姦、幼

兒殺しなどの犯罪が暗い背景をなすとともに、酒びたし、かつ拂い、そしてまた猥談などが彼等の生活の前面に出る。これらの最下層の人たちは主としてアイルランド人が多く、とても人間の住む所とは思えないような町のすみの屋根裏に住んでいゝる。故郷アイルランドを見捨てた来たこれらの人々の無規道と無慮と更に法律や秩序に對する暴力的な反抗と組織的な侵害はアイルランド人以外の労働者にも影響をあたえた。とりわけアイルランド人はウイズキーの密造をやつており、マンチェスターだけで一〇〇ほどのアルコールの蒸溜器があつて強力なウイズキーが醸造されたのである。そしてこれを飲む者はことごとく労働者階級なのである。今かりに週生産量を三〇ギヤロンとすれば、年生産量は一五六、〇〇〇ギヤロンであつて、これはみな課税をまぬかれて労働者階級の刺戟物となる。これらのウイズキーの醸造所は、うす暗いほら穴であつたりして、かりに官憲にみつかつたにしても三〇ポンドの罰金や短期間の入獄ぐらいでは到底これをなくすることはできないのである。

更に労働者にとつてその生活に悪影響を及ぼすのは、そのひどい住宅条件であつた。住居が人間の精神状態に及ぼす影響がどんなに大であるかは今更云うまでもないが、排水設備の不完全従つて下水道の不備は悪臭を發散させて労働者の住宅を愈々暗いものとし、よどんだ汚水、とどまつて流れない水溜りが至るところに出来る。そして修繕されぬままの壁の崩れかけた家、換氣の悪くうす暗い狭い部屋、こゝろいう不衛生な部屋で四、

五人の家族がひしめき合つて生きてゆく。このような住宅状態は子供たちをして両親の性的行動に興味をよびおこさせ、卑猥な言葉が彼等の日常語となり、下品なグロテスクな言葉を含みながら母から子供へ、そしてまた子供から子供へ傳えられ、また子供たちにとつて實に屈辱的な言葉をもつて両親は話を交わすのである。しかも労働者の住宅条件の悪さはこれだけではない。マンチェスターの裏町にゴミゴミと立ち並ぶ家には大抵地下室があつて、そこにはまたきわめて生活程度の低い最下層の人たちが住んでおり、マンチェスターだけでさういう人たちの数は二萬人にのぼつたといわれる。これらの多くの人たちはアイルランド人の家族で、手織工、煉瓦積みの労働者などが多く、その子供たちは乞食をしたりマツチを賣つたりして街から街へ、そして郊外へうろつき歩き隙あらば盗みもしかねなかつた。これらいわば悪の源泉として貧民窟が、多くはアイルランドからの出稼ぎの住家であつたことはギヤスゲルの強調するところであるが、しかしこれはわれわれに一體何を教えるであらうか。讀者はここで、英國資本主義の「いけにえ」となつて惱んだアイルランド人の運命のなかに、かつて帝國主義日本の重壓にうぢひしがれながらも、あらゆる迫害に耐えた朝鮮からの移民労働者たちの苦惱を思い浮べないだらうか。

四

紡績業における機械の發明がまだその初期の段階にあつたとき、その労働力の對象となつたものはまず子供であつた。水力

を利用して初期工場制度の時代には水流の便ある所に——それは大抵淋しい場所であつたが——六才から十二才頃までの子供たちが、ロンドンやパーミンガムなどのような大都會の孤兒院や救貧院からつれ出されて、いわば徒弟として働かされたのだ。そこではあたかも封建的な制度と近代的な生産様式とが混合した状態で行われていたのである。しかしながら次第にその工場のまわりに村落ができて人口が増加すると自由労働者の數もふえて、やがて相當な程度にまでこの徒弟制度をおしのけ、蒸氣機關の發明されるとともに、工場は次第に農村から都市へ集り、近代的工場制度確立のための條件がつけられたのだ。だが初期工場制度の時代、兒童労働が盛に使用されていた十世紀末から十九世紀までの間はひどかつた。非衛生的な環境の中で長時間労働に従事させられた子供たちの姿は繪畫などに残つていて、今もなお見る者の顔をそむけさせるが、とりわけそれは博愛主義者たちをいきどおらせたのである。一七九六年マンチェスター保健委員會の設立にあつて、パーシヴァル博士は兒童労働者の保護に關する聲明を出したが、またみずから大工場主であり政治家でもあつたサー・ロバート・ピールは工場の非衛生的な環境は傳染病の原因となり、はげしい労働と粗悪な食事のために心身ともにきわめて不健全な状態におちいりつゝあることを證言し、一八〇二年「徒弟の健康及び道徳に關する條令」いわゆる徒弟條令が萬場一致で可決されたのであつた。ではこの徒弟條令によつて兒童労働者の問題はすべて解決され

たかというに必ずしもそうではなかつた。一八〇一年から一八〇四年までの間に、蒸氣機關が工場の動力として支配的となつた結果、工場は不便な田舎から原料や石炭の豊富な都會に建てられるようになり、また大規模な紡績機械は幼年労働よりも成年男女の労働を必要とするようになったが、しかしまだ多くの少年労働者が使用されていた。そして機械においても多くの工場で大部分の織工は十六才から二十二才の女子であつた。

機械と人間の對立は蒸氣機關の發明と、これがマニユファクチュアに利用されるに及んでひどくなつたのであつたが、しかしマニユファクチュアの労働者はその當時しばらくの間は、少くとも自分の生活には事欠かぬだけの賃金を與えられていたのであつて、事實もつとも貧困のどん底におとし入れられた者こそ、ほかならぬ手織工たちであつた。そして彼等は蒸氣機關をはじめとするマニユファクチュア制度とはかない闘争を行わねばならなかつた。そしてその結果はやがて手織工を零落させてプロレタリア化し、潜在或は顯在の失業者となり労働者階級の賃金をひき下げる役割を演じたのであり、賃金の低い婦人や子供労働者にその職を奪われたため、大人の賃金は益々引き下げられる結果となつたのである。一八三〇年代ある工場においては賃金が出來高拂いであつたため、最高の賃金を得たのは發育の悪い青白い不健康そうな十六才ばかりの少女であつたといわれる。

労働者階級の貧困がどのような原因から起るか、この問題に

ちは、どのようにしてこれらの悪徳からまぬかれ、彼等の胸の中に道徳的な感情の芽ばえを絶やさぬようにすべきだろうか。ギヤスケルはこの問題について眞剣に考えたのである。その當時の識者には、労働者はばらばらの人間としてよりも階級として成長しつゝあるうす氣味悪い存在、あつかいにくい代物となつていたので、心ある人たちはもちろん、資本家までも労働者の教育施設の必要を力説したものであつた。若き日のロバート・オーエンもその一人であつたが、ギヤスケルもここで労働者に健康な「たましい」を養うために幼児教育が欠くべからざるものであることを説く。教育と説得によつて労働者のストライキをやめようとするその當時の考え方は、マルサスの思想のように不合理で暗い冷いものではないにしても、今日の眼をもつてすれば、やはり空想的な要素を多分に含んでいたのではないだろうか。

五

十九世紀初頭の英國にとつて労働組合運動はもはやさげがたい現實となつていた。すでにフランス革命の影響によつて労働者階級が革命的となつたのに頭を痛めた支配階級は、一八〇〇年、團結禁止法という無類の悪法をもつてこれをおさえ、英國労働運動史上かつてない暗黒時代が二十餘年にわたつてつづくのであるが、しかし労働者の反抗は絶えることなく或は公然と或は秘密のうちに行われたのであつて、一八一二年突如ランカシヤ地方をおそつたラディッド運動は近代以前の一擧的な性格

ヒューマニスト、ギヤスケルと産業革命期の英國労働者階級

つてはアダム・スミス以來の古典學派の經濟學者たちは資本制々度そのものに求めることなく、むしろ労働者階級の責任に歸しているが、とくにマルサスは労働者階級を貧困や悪徳から解放するために、人口増加を道徳的に抑制すべきことを説いている。しかしギヤスケルの意見はマルサスのそれとは異なる。すなわち賃金基金説を信奉して労働者の人口増加を抑制することを説いたマルサスに比べて、ギヤスケルの意見はきわめて合理的である。ギヤスケルはまづ資本制生産様式が支配的となるにつれて人口の増加は、さげがたい現實であることを認め、労働者の生活をひき上げるためには、何よりも労働者を現在の生活の仕方からひき離すことであつて、これは單なる知的な教えをもつてすることは不合理であるといふのである。まことにわが國のみならず英國においても資本制生産の發展にともない人口の増加もいちじるしくあつた。その原因となつたものが醫學の進歩にともなう死亡率の減少、更に人民の生活様式の變化によるものであつたが、それと同時にわれわれは工業人口が農業人口に比べていちじるしい増加を示したことを忘れてはならない。例えばランカシヤでは一七〇〇年から一八三一年までの工業人口の増加率は九倍であるのに反し、農業人口の増加率はわづかに四分の一であつたことを見れば、産業革命期における工業都市の増加がどれほどはげしかつたかを想像することができよう。労働者階級の人口の増大が彼等の深醉・喧騒・不節制と關係があるとなれば、新しい産業人口となるべき労働者の子供た

を色こく殘していたにせよ、とに角その規模の大きさにおいて労働者の團結の力を示した大事件であつた。當時労働組合運動に反對する口實として、資本家側の「國家の秩序を亂し、公共の福祉に反する」というおきまりの文句のほかに一つの有力な理論があつた。ほかでもない自由放任主義である。労働力が労働者にとつて一つの財産であり、資本家の資本と同じものならば、労働力も資本と同じ經濟的な法則に従わねばならない。従つて資本家はその資本を自由に使用することができるよう、労働者も自分の自由な意思にもつてその労働力を賣るものでなければならぬ。もしそうだとすれば労働者が團結して賃金の値上げをせまるとすれば、それは労働者たちがみずから契約自由の原則をふみにじり、經濟法則を無視するものであるといふのである。アダム・スミスは卓抜な識見をもつて、労働者の組合が賃金をひき下げようとする雇主側の團結に對抗してたかうことは當然であるといふが、この場合のスミスの自由主義は労働者とその最低生活を守るための團結に對して國家の不當な干渉を排除すべきことを強調しているのに反し、十九世紀に入ると資本主義のイデオロギーとしてのベンサム功利主義となえられるや、自由主義は逆に労働運動を一つの壓力として感じはじめたのである。従つて資本主義生産がようやくその軌道に乗つてきたその當時、ギヤスケルをも含めてその當時の知識人たちがともすれば労働組合を有害無益なものと考えたのもやむを得なかつた。労働組合がその合法的な地位を獲

得し、ストライキが労働者の権利として次第に認められるようになったのは、團結禁止法が廢止された一八二四年よりずっと後のことであつたからである。

以上のようにギヤスケルは労働組合については保守的な意見をもつていたが、しかしその時代のいわゆる自由主義者と異つていた點は、資本制社會の矛盾、經濟社會の危機を強く意識していたことである。すなわち過剰労働力の存在と利潤率の低下の傾向、機械の採用が益、はげしくなり、資本家と労働者の間の對立の激化の中に、人間としての労働者と機械そのものの對立が深刻化する。機械が老大な生産力をもつて人間労働を壓倒するとき、人間の労働力そのものは益、無價値なものとなつてその価格は日毎に安くなる。それはすでに自分の労働力が唯一の財産である産業人口にとつては一つの危機ではないだろうか。こうした危機が社會全般にみえざる、いわば一般的危機の様相を呈するとき、社會の革命は、實にさげがたいものとなると云うのである。そしてこのように語るギヤスケルのはげしい語調のなかには、恐らくは後にマルクスに大きな影響をあたえたと思われる點が多い。

※ ※ ※

われわれはギヤスケルの思想のなかに労働者階級の苦惱と近代社會の矛盾を讀みとることができた。マルクスやエンゲルスが、そしてトインビーやマントウが産業革命を發見するずっと以前に、ギヤスケルは現代資本制社會がもつ矛盾を、きわめて

書評

藤田五郎著「近世經濟史の研究」

尾城 太郎 丸

「マニユ論争」を中心に進められて來た從來の日本近世經濟史、とくに幕末維新史の研究が、最近に至つて、民族問題の視角からその國際的諸條件の分析に重點を置くようになったことは、たしかに注目すべき傾向である。かゝる傾向の中で、今まで「マニユ論争」の主要な課題であつた幕末維新期の經濟段階規定論から解放されることなしに、明治維新、従つて日本の近代化の綜合的把握は不可能であるという意見すら現われるに至つた。しかし、日本の社會の内部構造の分析が、そのために、もはや重要性を失つたことになるのではなく、むしろかえつて、問題が進化すればするだけ、内部構造の分析も深化しなければならず、問題把握もより明確でなければならぬ。(「封建社會の展開過程」序文) 故藤田五郎氏のかゝる研究態度から生れた大きな成果が、他ならぬ氏の「豪農論」なのであつた。

藤田五郎著「近世經濟史の研究」

素朴な形ではあつたが、しつかりと把握していたのである。社會上政治上のいかなる事件も、その根元は遠くさかのぼつてはじめて探られるものとすれば、現代社會の色々な矛盾はそのまゝ將來の大事件につらなるものであらうか。ともあれ、つぎのことはたしかに言えるであらう。すなわち「労働者階級の苦惱は産業革命とともに始まり、資本制社會の發展にもなつて増大するということ」は。一九五四、三、一四、夜

(なお、この貴重な書籍を二年半という長い間お貸し下さつた藤林敬三教授の御好意に對して厚く感謝の言葉をのべさせていただきます。)

こゝに紹介しようとする「近世經濟史の研究」は、庄司吉之助、小林昇、羽鳥卓也、山田舜の四氏が、藤田氏の生前の雜誌論文の中から選擇編集したもので、前編が「近世經濟史の分析視角」後編が「豪農の歴史の形態」と題され、前編では「豪農論」の理論構成を示した三論文、後編には、その理論構成の基礎をなす豪農研究の成果が發表されている三論文と、別に「マニユ問題」に言及した一論文とが收められており、卷末には、藤田氏の研究基準について、初期の業績を中心に羽鳥氏が、後期の業績を中心に山田氏が、それぞれ問題を執筆され、最後に小林氏の藤田氏回想が寄せられている。

そして、そこには「近代産業の生成」から「封建社會の展開過程」に至る諸著の中に結實した「經濟史學のユニークな一體系が、どのようにして生れ、どのようにして展開し、どのような反省を建設者自らに求めたか(本書序文)」という、いはば藤田氏の研究過程が綴られているから、卷末の問題を参照して藤田氏の全理論體系と關連せしめつゝ、本書に見られる氏の論理の展開を辿つて見よう。

二

いわゆる「二つの途」の日本への適用の問題は、幕末維新史研究にあつて、單に經濟段階を規定するためのものでなく、日本の近代化、そのブルジョアの發展の特質、更に明治絶對主義の性格、従つてこれに對するブルジョア民主主義革命—自由民